

コロナ禍における法文学部の

被災記録の収集と保存Ⅺ

— 2023年度学生手記の分析 —

青木理奈・鈴木 静・福井秀樹
小佐井良太（福岡大学法学部）・石坂晋哉・太田響子
池 貞姫・十河宏行・中川未来

1. はじめに

新型コロナウイルス感染蔓延の長期化は、大学生の学修や日常生活にどのような影響をもたらしているのでしょうか。新型コロナウイルス感染蔓延は、多くの人にとって予期しえなかった深刻かつ長期にわたる未曾有の災厄である。全国の大学によるコロナ禍対応は、年々変化しており、愛媛大学でも2022年4月から原則対面による授業に切り替えられている。さらに、2023年5月8日から新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行したことに伴い、行政による事業や行動の制限も緩和されている。社会一般でもコロナ禍前の経済社会状況に戻りつつあるとはいえ、我々の生活に与えた影響は大きい。多くの人々はコロナ禍以前の生活に完全に戻ることはないと感じており、アフターコロナとしての生活が始まっている。大学生も同様であると考えられるが、具体的に授業や課外活動、アルバイトや就職活動等は、どのような変化をもたらし、どのようなストレスがかかっているのでしょうか。

本稿は、コロナ禍初期である2020年に入学してきた4回生（2023年当時）に4年間を振り返ってもらい、コロナ禍における学生生活についての手記を募集し収集した。収集した手記を、学生支援の観点から分析して整理し、その一部を公表する。筆者らは、主にコロナ禍における大学生の学修状況や生活状況を理解することに努めた。また、学生自身の細やかな心情の動き・変化が現れている部分に特に注目し、コロナ禍の記録の一部として公表する。

なお、筆者らは、今回の新型コロナウイルスのような全世界的規模で起きている災厄について、記録や教訓を収集、保存し、継承していけば、それは、次なる災厄への備えになると考えている。なにより、感染状況や国および地方自治体の感染症対策が

刻一刻と変わっていくコロナ禍で、その変化や大学および学部の対応を時系列で収集および保存することは不可欠なことであると考えている。これまで本プロジェクトでは、愛媛大学法文学部の学生を対象とし、アンケートを2020年度から4年間実施し、学生手記を収集・分析、さらに座談会を開催することを通じて、学生生活の変化や心情等を把握してきた。本稿は、その一環として公表するものである。

2. 対象と方法

2023年11月13日から2023年12月6日の間、愛媛大学法文学部4回生の学生を対象に、「コロナ禍における法文学部学生の学修・生活への影響について」の手記を募集した。具体的には、「今年度のあなたの生活について、そしてコロナ禍初期の2020年度から今まで（約4年間）の大学生活や日常生活を1,200字程度にまとめてください。」と依頼した。その結果、8件の手記が寄せられた。

2-1. 対象者の属性

対象者の属性¹⁾は、以下の表に示すとおりである。

| ID | 性別 | コース | 昼夜間主の別 |
|----|----|-----|--------|
| 1 | 女性 | 法政 | 昼間主 |
| 2 | 女性 | 人文 | 夜間主 |
| 3 | 女性 | 法政 | 昼間主 |
| 4 | 男性 | 法政 | 昼間主 |
| 5 | 男性 | 法政 | 昼間主 |
| 6 | 女性 | 人文 | 夜間主 |
| 7 | 女性 | G S | 昼間主 |
| 8 | 女性 | 法政 | 昼間主 |

2-2. 分析方法

手記の分析を行うにあたっては、基本的にクリッペンドルフの内容分析手法（クリッペンドルフ、1989）を用いた。また、この分析手法を用いた学生のレポート分析に関する先行研究、森・大橋（2008）に多くの示唆を得ている。具体的には、以下の

1) 愛媛大学法文学部には、昼間主・夜間主コースがある。更に、昼間主では2回生から、3つの所属コース（法学・政策学履修コース [法政]、人文学履修コース [人文]、グローバル・スタディーズ履修コース [GS]）に分かれ、夜間主では2回生から、2つの所属コース（法学・政策学履修コース [法政]、人文学履修コース [人文]）に分かれる。

手順により分析を行った。

- 1) 手記内容を文脈毎に全て抽出する。
- 2) 文脈の内容により記録単位を作成する²⁾(抽出した文脈をまとめる)。
- 3) 類似性のある記録単位に基づき、サブカテゴリー名を付ける。
- 4) 同様の作業(類似するサブカテゴリーをまとめ)をし、カテゴリー名を付ける。

3. 倫理的配慮

調査対象者の学生には、研究の趣旨について書面による説明を行い、研究への協力を承諾した学生が手記を提出している。本稿では、プライバシーの保護のため個人名は特定されないように配慮している。

4. 結果の概要

本研究では、テキスト化された手記を文脈毎にまとめ、それら文脈内容により記録単位を作成した。その結果、記録単位数は141件になった。

次に、文脈内容の類似性に従って分類したところ、8個のカテゴリーに分類することができた(表1)。さらに、8個のカテゴリーを類似性に基づいて3つのコアカテゴリーに分類し、それぞれ「大学生活」、「日常生活」、「その他」とした。以下、コアカテゴリーごとに分析していく。

表1 同一記録単位から分類した8カテゴリー N=141件

| コアカテゴリー | | カテゴリー | |
|---------|----|------------------|----|
| 大学生活 | 81 | 1. 授業関係 | 30 |
| | | 2. サークル・部活動・課外活動 | 22 |
| | | 3. 友人関係 | 20 |
| | | 4. その他 | 9 |
| 日常生活 | 24 | 5. 行動面 | 10 |
| | | 6. 経済面 | 10 |
| | | 7. 家族関係 | 4 |
| その他 | 36 | 8. インターンシップ・就活 | 36 |

2) 記録単位とは、文脈毎に抽出した文章をさらにまとめたものである。例)「授業形態が変わり、大学に行く機会がなくなった。」という文脈は、「通学頻度の減少」という記録単位とした。

4-1. 「大学生生活」に関する内容分析

表2 「大学生生活」に関する内容分析結果 N=81件

| カテゴリー | サブカテゴリー | 類似記録単位群 | | |
|---------------|-------------|-------------------------|------------------------|---|
| 授業関係 | 振り返り | 26 | A 対面良い、意欲が出た、大学生としての実感 | 7 |
| | | | B 遠隔合わない、不満、不安 | 6 |
| | | | C 遠隔慣れ、便利さ | 7 |
| | | | D 対面での疲弊 | 2 |
| | | | E ゼミ選考に対する負の感情 | 4 |
| | 教員との関係 | 4 | A 相談に乗ってくれた | 4 |
| サークル・部活動・課外活動 | 振り返り | 15 | A 制限され思うような活動できず | 9 |
| | | | B 大学の対応に対して不満 | 2 |
| | | | C 入部を諦めた、退部した | 2 |
| | | | D 学生の気持ち、思い入れ | 2 |
| | 活動に対する記述 | 4 | A 活動ができるようになった | 1 |
| | | | B コロナ禍前のような活動はできない | 2 |
| C 大学の対応への願望 | | | 1 | |
| イベント | 3 | A 学祭の飲食販売再開、海外渡航の再開への喜び | 3 | |
| 友人関係 | 振り返り | 14 | A 友人作れず苦勞、孤独 | 6 |
| | | | B 対面、サークルで友人できた | 5 |
| | | | C 後悔、下回生羨む気持ち | 3 |
| | 今年度（2023年度） | 6 | A 交流増加 | 2 |
| | | | B 友人と疎遠になった | 2 |
| | | | C 関係性の発展なし、馴染めない | 2 |
| その他 | 振り返り | 9 | A 大学生の実感なし異例の学生生活 | 5 |
| | | | B 大学の対応に対して不満、指摘 | 4 |

「大学生生活」に関しては、4個のカテゴリーと8個のサブカテゴリーに分類することができた。このうち、カテゴリーについては類似記録単位の多い順に「授業関係（30件）」、「サークル・部活動・課外活動（22件）」、「友人関係（20件）」、「その他（9件）」だった。

「授業関係（133件）」のサブカテゴリーの内訳は、「振り返り（26件）」、「教員との関係（4件）」であった。類似記録単位群で最も多かったのは、対面授業に対する「対面良い、意欲が出た、大学生としての実感」と、「遠隔慣れ、便利さ」であった。原則対面となった2022年度の結果は、「対面の良さ」の記述が一番多く次に「遠隔の悪さ」に対する記述が多かったが、4年間振り返ってみると、対面と遠隔のそれぞれ

の良さが同程度書かれる結果となった。

「サークル・部活動・課外活動（22）」のサブカテゴリーの内訳は、「振り返り（15件）」、「活動に対する記述（4件）」、「イベント（3件）」であった。類似記録単位で最多のものは、過去を振り返って「制限され思うように活動できず」全員対面で集まる事がなかった等の記述であった。

「友人関係（41件）」のサブカテゴリーの内訳は、「振り返り（14件）」、「今年度（2023年度）（6件）」であった。最も多かった類似記録単位は、過去を振り返って「友達が出来ず苦勞、孤独」であり、コロナ禍1年目に入学した学生（2023年度4回生）が、大学で友人を作ることが難しかったのがわかる。

「その他（9件）」のサブカテゴリーは、「振り返り（9件）」であった。これらは、4年間振り返り、対面授業になる3回生まで大学生の実感がなかったことへの悲観的な気持ちや大学に対しての不満等が書かれていた。

4-2. 「日常生活」に関する内容分析

表3 「日常生活」に関する内容分析結果 N=24件

| カテゴリー | | サブカテゴリー | 類似単位記録群 | | |
|-------|----|----------|---------|---------------------|---|
| 行動面 | 10 | 振り返り | 7 | A 引きこもっていた | 2 |
| | | | | B 負の感情しかなかった | 2 |
| | | | | C 感染リスクが怖かった | 1 |
| | | | | D 資格とった、挑戦した | 2 |
| | | 変化なし | 3 | A 不便しなかった | 1 |
| | | | | B 旅行にいけた | 2 |
| 経済面 | 10 | 振り返り | 7 | A アルバイトの経験 | 4 |
| | | | | B アルバイト無し、収入減少、シフト減 | 3 |
| | | 収入減 | 3 | A 仕送り増やしてもらった、貯金崩した | 3 |
| 家族関係 | 4 | 現実に対する記述 | 2 | A 心配された | 1 |
| | | | | B 帰省は減った | 1 |
| | | 学生の気持ち | 2 | A 親へのありがたさ | 2 |

「日常生活」に関しては、3個のカテゴリーと6個のサブカテゴリーに分類できた。類似記録単位は「行動面（10件）」・「経済面（10件）」そして、「家族関係（4件）」と続いた。

「行動面（10件）」・「経済面（10件）」は、いずれも振り返って特に1、2回生のときの出来事の記述が多かった。

「家族関係（4件）」は、4回生で就活を終えた今、両親に感謝する記述が見られた。

4-3. 「その他」に関する内容分析

表4 「その他」に関する内容分析結果 N=36件

| カテゴリー | サブカテゴリー | 類似記録単位群 | | |
|-------------|----------|---------|---------------------------|---|
| インターンシップ・就活 | 現実に対する記述 | 15 | A 受験した、試験・面接対策した | 8 |
| | | | B 合格、内定が決まった | 6 |
| | | | C 希望通りにならず | 1 |
| | 学生の気持ち | 12 | A 就活・感染への不安、焦燥感、心配、懸念 | 8 |
| | | | B 壁を乗り越え自己肯定、他人へ相談し気分が晴れる | 3 |
| | | | C 後悔、未練 | 1 |
| | 対面活動 | 5 | A 問題なかった | 2 |
| | | | B 緊張、マスク着脱に慣れない | 3 |
| | オンライン活動 | 4 | A 便利、経費削減 | 3 |
| | | | B 熱量の伝わりづらさ | 1 |

「その他」に関しては、1個のカテゴリーと4個のサブカテゴリーに分類された。類似記録単位は「インターンシップ・就活（36件）」だった。

「インターンシップ・就活（36件）」のサブカテゴリーの内訳は、「現実に対する記述（15件）」、「学生の気持ち（12件）」、「対面活動（5件）」、「オンライン活動（4件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「受験した、試験・面接対策した」であり、就活の大変さ、準備の大変さを詳細に記述している学生が多かった。

5. 分析と考察

今回の手記で、類似する記録単位数が最も多かったのは、「インターンシップ・就活」カテゴリー（36件）であった。2020年度からの手記の変化を見てみると、過去3年間では、「授業関係」の記述が最多であり、2020年度では全員が遠隔授業について触れ、2021年度では遠隔授業に触れない学生が見られ、2022年度では、遠隔授業の記述は少なく対面授業の記述が大幅に増えていた。しかし、2023年度では、直近の活動「インターンシップ・就活」の記述が最多となっており、「授業関係」については、振り返る過去の出来事として捉えていることである。

1) 大学生生活に関する内容分析

2023年度の「授業関係」（30件）では、1・2回生の遠隔授業での苦勞の記述があったが、振り返ると遠隔授業も慣れると便利なところも多く、時間や場所の自由、自己ペースでの学習等、都合が良かったという記述も目立った。ただ、ゼミ選考について

は否定的な声が目立ち、ゼミ選考時にしっかり吟味して決められなかったと落胆する気持ちが書かれていた。

ゼミを選ぶ際、文字だけの資料1枚で、2年間お世話になる教員を選択することになりましたが、もう少し配慮が必要だったと思っています。現に今、ゼミの教員と合わなくて困っている友達が法文学部にいますし、ミスマッチは相当起きていると思います。私が今のゼミの先生を選んだときも、先生に実際に会ったことはなく、非同期型の授業でお世話になっただけで、話し方や性格については本当にわからない中で選びました。(ID3)

ゼミナールは感染対策により説明会が無く、文面のみで判断するしかなかったため正直運であった。(ID5)

教員との関係を書いた学生は、良好な関係でいるようで、手記を寄せた時期が卒論執筆の時期と重なっていたこともあり、卒論に関する相談や、就活に関する相談を主にゼミの教員にしているようだった。

ゼミの先生との出会いも大きかった。先生はいつでも、どんな些細な話でも親身に聞いてくださり、心強い存在だった。(ID6)

また、「サークル・部活動・課外活動(22件)」でも、振り返って活動ができなかったことへのもどかしさの記述が大半であった。対面授業になってからも制限があったことで、実質、まともな活動ができなかったと考える者が大半をしめており、大学当局の対応に対して疑問を投げかける記述が見られた。ただ、4年生最後の年に学生祭で飲食販売が再開したということもあり、最後に学生祭の雰囲気を知れて嬉しかったとの記述は複数みられた。

サークルについても、愛媛大学の対応は他の大学と比べてよくないものだったと思っています。学生の自主性を重んじるというよりは、大学から感染者を出したくないから学生の行動を厳しく縛る、といった対応でした。サークルに所属していても満足な活動はできませんでした。(ID3)

今年度は直近3年に比べると随分と学生祭は盛り上がっていたように見受けられましたので、卒業する前に学生祭本来の空気感を味わうことができたことは嬉しく思います。(ID4)

大学生活での「友人関係」については、遠隔授業時には全く友達が作れず苦勞したこと、そして、対面授業を通じて友人が増えたことの記述が見られ、昨年度までの手記と大きく変わりはなかった。しかし、4回生時点での手記ということもあり、就活等で友人との交流が少なくなり、疎遠になった等の記述が複数見られた。学生らが大学の友人と交流したのは、実質、3回生の一年間と4回生の就活が終わってからの半年の期間だったことが伺える。全体的に友人に関する記述が少ないことも、友人関係が希薄なままだったこの学年ならではの特徴である。一方で、少ないながらも、貴重な友人に助けられた、信頼できる友人を大学生活で得たことでコロナ禍での生活が改善された、との記述もあり、学生同士が支え合うことの価値を実感できた者もいることを示している。

人数は少ないが、かけがえのない2人の友人に偶然出会うことができ、コロナ禍での生活が色づいた。(ID6)

そして、大学生活での「その他」については、大学生活を振り返って、大学生の実感がなかったことに対する悔しきや自分たちの年代が異例の学生生活だったこと、さらに、そういった時の大学対応に対しての不満が書かれていた。

2) 「日常生活」に関する内容分析

「日常生活」に関する記述では、前年度(2022年度)では、「体調面」の記載に関して、心身ともに体調を崩しがちであった旨の記述が多くみられており、とりわけ、メンタルヘルスの不調から心療内科を受診することを記載する者も、複数見られた。しかし、今年度は、日常生活で体調を崩していることを示唆する記載は見られなかった。特筆すべきことは、4回生の手記だということもあり就活やその時期に精神面を崩したことを示唆する記載が多くみられた。この点については後述する。

「行動面(10件)」、「経済面(10件)」ともに、振り返って、2020年頃の自宅内にとどまり外出を自粛する時期の記述、アルバイトが出来ず収入がない(減少した)記述が目立った。そのアルバイト収入額が、現在、回復しているかという点、就職活動中にはアルバイトが出来ず、貯金で生活していたり仕送りを増やしてもらったことが記

載されていた。

アルバイトに関しては、1回生の頃より続けていたアルバイト先がコロナの影響なのか経営不振により7月で閉店してしまったので、一時は貯金で生活する期間がありました。閉店した後もまだ生活できていたので、それまでと変わらず親に仕送りを求めたことはありませんでしたが、少し心配されました。(ID1)

仕送りは、公務員試験の勉強でアルバイトを休んでいた時期だけ多くしてもらっていた。それ以外の時期は、毎月同じ額を仕送りしてもらっていた。(ID8)

また、「家族関係」では、4年間の生活を、経済的、精神的に支えてくれた親に対する感謝の気持ちも記載されるものが多かった。コロナ禍の影響を受けた学年と言われている学生たちの精神的な成長が見られる記述である。

3) 「その他」に関する内容分析

今回の手記の特徴は、対象を4回生に絞っていることもあり、8カテゴリーの中で、「インターンシップ・就活」に関する記述が、一番多かった。その内容も、具体的に、試験(受験)対策の話から実際の試験(受験)の話、結果と時系列的に記載されていた。特筆すべきことは、詳細に書かれていたことが、試験(受験)対策時の精神面についてであり、将来への期待と不確実性に関する記述が目立ったことである。また、一般的な就活時に見られる焦燥感だけでなく、インターンシップを行った2022年でも新型コロナウイルス感染への不安は大きく、学生は感染対策を自ら進んで行っていた。このことは、コロナ禍前よりも就活時に精神面で不安になる要素が増えたことを意味する。コロナウイルスに対する不安は依然として存在し、今後も消えることがない可能性を示唆している。

精神的には外出する際や人と会う際の感染リスクが非常に怖く、人と食事はせず帰宅の際は全ての荷物をアルコール消毒した。手が荒れるほどに消毒していたため、やはり受験のプレッシャーと感染への恐怖が精神を追い詰めていたのだと思う。勝手に涙が流れ、一時は睡眠障害になったので精神面が一番辛かった。(ID5)

また、これまでマスクを着用する生活が続いたため、就活の対面活動でマスクを外すことのためにためらいがあり、実際に支障が生じたと認識している。

企業説明会の多くはオンラインで行われ、直接会場へ行く時間を省くこともでき、気軽に参加することが出来たが、実際の選考はすべて対面で行われたため緊張が大きかった。(ID7)

面接に大きく支障を生んだ。面接の際にはマスクを外すが、マスクを外して話すことに多大な違和感があり、おそらく不自然な表情や口の形になっていたと思う。3年間マスクの着用を続けたことで、マスクを外した状態で人と会話することが普通でなくなった。(ID5)

また、就活の面接で聞かれることが多い「学生時代に力を入れたこと」の略称である「ガクチカ」問題について、今回は不安や葛藤、ネガティブな記載が見られなかった。4回生は、コロナ禍で行動制限がかかった時期が一番長かった学年であり、この結果は想定外であった。学生らは、コロナ禍の社会の変化に適応している様子が見受けられ、遅しさを感じる。

6. 今後の課題

本稿は、コロナ禍の学生生活を理解するために、愛媛大学法文学部4回生によって書かれた手記を分析したものである。2020年度から新型コロナウイルスの感染拡大に伴う愛媛大学法文学部学生への影響について、アンケート・手記・座談会等を通じて具体的な被害や葛藤、適応するプロセスの一端を明らかにしてきた。

2023年度の手記では、4年間を振り返ってもらった。4回生ということもあり、就職活動の内容が目立った。また、振り返って書かれた記述では、大学入学から授業提供体制の大きな変化や大学構内に入れられないという大きな制約があり、大学生という実感のないまま2年間過ごさざるをえなかったことへの悔しさが記載されていた。一方で、新たなオンライン技術や経験を通じて得られたスキルに対して成長もあり、学生自身が貴重な経験となったと前向きな気持ちで卒業しようとしていた。

なお、手記を寄せてくれた学生は、愛媛大学法文学部4回生の一部であり、学生全体の傾向をあらわしてはいない。学生のなかには、メンタルを崩すほどの葛藤を抱えている者、現在も孤立感から抜けられない者、学業への意欲を減じたまま戻らない者、経済的な困難を抱えている者、対人関係や社会的な経験の欠如をコンプレックスに思う者がいることを忘れてはならない。その影響は、長期間にわたって継続する可能性のある者らがいることを忘れてはならない。

2024年現在、コロナ禍が過去の出来事として語られる一方で、感染対策や社会的距離（ソーシャルディスタンス）の確保、大学におけるオンライン授業の継続などが日

常の一部として定着している。コロナ禍での様々な変容が、現在にも影響を与え続けているなか、大学生にはより変化に対する柔軟性や適応力が求められている。そのことは、大学生に新たな経験をもたらすとともに、人間関係の変容などによりメンタル面に影響も与える。これらに配慮しながら、学生個人の多様性に配慮した学生支援体制の拡充が大学には求められる。

謝辞

手記を寄せてくれた法文学部学生の方々ならびに手記募集に携わっていただきました法文学部の教員に感謝の意を表します。また、この研究は、令和5年度法文学部戦略経費、及び JSPS 科研費19K21723の助成金交付により遂行されたものです。

参考文献

- 1) クリップペンドルフ (1989)『メッセージ分析の技法：「内容分析」への招待』(三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳) 勁草書房。
- 2) 森ウメ子, 大橋千栄子 (2008)「手記から学ぶ病児の理解—学生の読後感レポートからの分析—」,『大成学院大学紀要』10,121-131.
- 3) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ—学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果—」愛媛大学法文学部論集第50号(社会科学編), pp37-68. 2021.2月
- 4) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱ—2020年度学生座談会報告書—」愛媛大学法文学部論集第51号(社会科学編), pp117-138. 2021.9月
- 5) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅲ—2020年度学生手記の分析—」愛媛大学法文学部論集第51号(社会科学編), pp93-111. 2021.9月
- 6) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ—2021年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果—」愛媛大学法文学部論集第52号(社会科学編), pp19-54. 2022.2月
- 7) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅴ—2021年度学生手記の分析—」愛媛大学法文学部論集第53号(社会科学編), pp37-57. 2022.9月
- 8) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅵ—2021年度学生座談会報告書—」愛媛大学法文学部論集第53号(社会科学編) pp133-150. 2022.9月
- 9) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅶ—2022年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果—」愛媛大学法文学部論集第54号(社会科学編), pp97-134. 2023.3月
- 10) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅷ—2022年度学生座談会報告書—」愛媛大学法文学部論集第55号(社会科学編) pp133-146. 2023.9月
- 11) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅸ—2022年度学生手記の分析—」愛媛大学法文学部論集第

青木理奈・鈴木 静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池 貞姫・十河宏行・中川未来

55号（社会科学編），pp75-94.2023.9月

- 12) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅹー2023年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果ー」愛媛大学法文学部論集第56号（社会科学編），pp19-46.2024.3月